

直江兼続対徳川家康「幻の白河決戦」 兼続弟、 大国実頼に命じ南山を守る

鳴山城周辺には、3万人を配備か

慶長三年（一五九八）若松城を居城とした一二〇万石の上杉景勝。すべてを景勝から委任された執政の直江兼続。豊臣秀吉の死後、勢力拡大をもくろむ徳川家康。家康は『譜牒余録』慶長五年（一六〇〇）五月三日、諸大名に上杉討伐令を出します。景勝と兼続は『上杉文書』六月十日、神指城築城を中止し、家康との臨戦態勢に入ります。『白河風土記』によると、上杉軍は、奥州街道を封鎖し、新たに街道（現一九四号線）を開き、白河の南、皮（革）籠原に決戦場を造成、阿武隈川や黒川から水を引き入れ、正面で徳川軍を食い止め、西側、東側、後方の三方から徳川軍を取囲み殲滅する作戦を考えていました。

一、正面は、六万四千人を配置し、白河南の皮（革）籠原に防塁を築き、敵を足止めする。

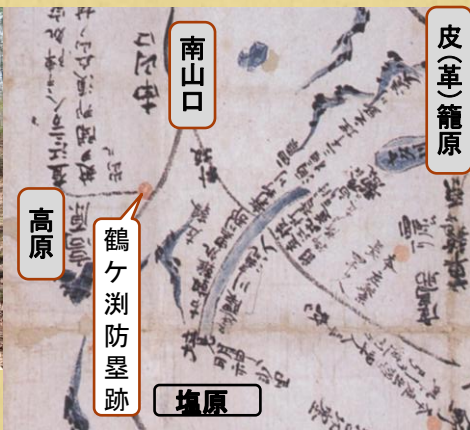
二、正面後方の勢至堂峠には、景勝本陣を築き八千人を置く。馬入峠周辺には二万人を置く。

三、西の南山には、南山田島の鳴山城を拠点に、兼続は弟に命じ山王峠南の鶴ヶ淵に防塁を築き三万人を置く。

四、東の棚倉に、同盟を組んだ佐竹義宣が本陣を築き、政宗に敗北し会津を去った葦名義広を置く。



九々布城跡

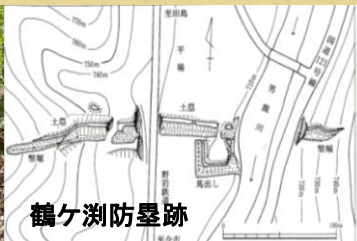


いう布陣をし、上杉軍は家康との「決戦」に備えていましたが、七月二十五日の小山評定により、家康は西に引き返し、関ヶ原の戦いとなりました。そのため直接戦うことはなかったのです。関ヶ原に匹敵する白河の戦いは「幻の白河決戦」となったのです。両軍の国境を挟む布陣は、『大嶋文書』によると慶長六年五月十一日まで続いていました。南山の田島でもそれは同じでした。

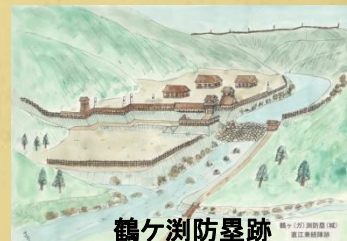
下郷町中妻には、二重土塁を伴う「九々布城跡」が築かれ、鳴山城の後方拠点として控えていました。



鶴ヶ淵防塁跡



鶴ヶ淵防塁跡



鶴ヶ淵防塁跡

鶴ヶ淵防塁跡 栃木県日光市上三依

鶴ヶ淵防塁跡は、国道121号線と男鹿川の西に長さ105メートル残されています。二重土塁、空堀、角馬出が残されています。東の山上には物見が置かれていました。『会津旧事雑考』6月10日、景勝は領内の城修理を指示します。『覚上公御書』『上杉家記』慶長5年7月22日「兼続は弟の大国実頼へ、鶴淵と物見を丈夫に普請するよう、鹿沼右衛門に申渡し、湯本、高原には、栗林肥前を派遣。塩谷伯耆守、栗林肥前を派遣。佐藤勘介を桧枝岐口へ副将として回す」よう指示しています。石田